

## P-237

プロトコルを導入した人工呼吸器装着患者の鎮静・鎮痛管理

高山赤十字病院 救命センター

中谷 未樹、渡辺 裕子、田中 美子、泉谷美恵子

近年では“鎮痛を基盤とした鎮静”が重要とされている。つまり疼痛を軽減することにより鎮静薬の必要性が減少し、場合によっては必要なくなるという考え方である。十分な鎮痛の上で、鎮静を行うことで患者に負担の少ない治療が可能となり、血行動態の安定・治療期間の短縮・人道的な対応・PTSDの頻度が低下するというメリットがあるとされている。

米国集中治療医学会（SCCM）<sup>1)</sup>では、鎮静・疼痛・せん妄の管理を3つの柱としている。鎮静・鎮痛管理においては、「鎮静の目的」「目標とする鎮静深度」を明確にし、薬剤投与のプロトコルや、鎮静・鎮痛スケールを活用するなど施設内で共通意識を持っておくことが推奨されている。当病棟では昨年度より鎮静評価スケール（Richmond Agitation-Sedation Scale 以下 RASS と略す）を取り入れているが、RASS の目標値を定めた鎮静コントロールがなされていない。また、鎮静薬と鎮痛薬が混合注入されているため、それぞれの評価が困難な状況である。鎮痛・せん妄においてはセンター内に共通のスケールがないため正確な評価ができていない。

今回、人工呼吸器装着中の外科疾患患者を対象に、共通のスケールを用いて統一された鎮静・鎮痛・せん妄評価を行った。その評価をもとに、作成したプロトコルを用いて看護師が鎮静・鎮痛をコントロールし、患者が安楽に過ごすことが出来るよう取り組んだので、ここに報告する。

## P-239

ハンドケアによる看護師の癒しの効果

姫路赤十字病院 医療社会事業部 総合相談支援課

田中 弘子、黒田 知美、石野 美紀、大泉万里子、柴田 郁美、松本みさ子、北山さゆり、坂本佳代子、三木 幸代

【はじめに】病院行事参加にあたり、ハンドケアの練習を行った。自主的に看護師18名の参加があり、その中から「自分自身が癒やされた」という声が聞かれた。今回ハンドケア体験が生み出した効果について報告する。

【目的】ハンドケア体験が看護師に生み出す効果を明らかにする。

【方法】練習終了後、看護師18名を対象に、1.ハンドケアの受け手体験、2.市民対象のハンドケア提供体験、2つのアンケートを実施しデータを収集した。結果から、ハンドケアの効果について分析した。

【結果】ハンドケア体験の中には、実際の行為としては、スキンシップとコミュニケーションが含まれていた。特に、ハンドケアの受け手体験を通し、観察やケアによる安心感、そしてリラックスできる体験であることを学んでいた。ハンドケアの提供体験を通し、私も患者を癒やせると思った、自分自身もゆっくりした気持ちになったと充足感を得ていた。

【考察】ハンドケア体験の中で、スキンシップやコミュニケーションを通し、受け手体験からは技術的な視点の学びやケアすることのすばらしさを確認していた。それが学びの刺激となり、新たな自分自身の持ち味として技術を生かしていこうと新たな意欲を生み出していた。また提供体験を通し自らが癒やされる体験をし、さらに患者を癒やせることを実感することで、看護師としての満足感を得るに至っていた。過度の緊張や慢性的な心的疲労を伴う看護師には癒しが必要不可欠である。今回、ハンドケア体験には、癒やしと新たな意欲という効果を看護師に生み出していた。現在、ハンドケアは26名の看護師がクラブ活動として練習をしている。今後、体験を通して習得した癒やしの効果を発揮できる場を増やしていきたいと考える。

## P-238

小児における新点滴固定法の効果

福井赤十字病院 看護科

近藤 房江、井上恭久子

【はじめに】当院小児病棟では、フィルム材使用と毎日の固定直しにより点滴管理を行ってきた。しかし点滴トラブルにより度重なる固定直しや再血管確保をせざるを得ない状況であり、今回エラストコンテープを貼付した点滴固定法（新固定法）を考案し実施した。その結果従来の点滴固定法（旧固定法）との比較において有効性が得られたので報告する。

【方法】当院小児病棟へ入院した児516名（H22年1月～9月）に対し、年齢、点滴固定法、トラブル内容、対応について調査し2検定で有意差を確認した。また小児病棟看護師21名に質問紙調査を行った。

【結果・考察】点滴トラブルは、旧固定法208件中48件、新固定法334件中28件で、新固定法が少なかった（ $p < 0.01$ ）。固定法別と年齢別では、旧固定法は1歳児が23件、1歳未満児の14件の順であった。新固定法は1歳児が12件、1歳未満児が7件で、新旧固定法ともにトラブル有は1歳児が多いという特徴がみられた（ $p < 0.01$ ）。トラブルで最も多かった針と接続部からの液漏れは、新旧固定法ともに1歳児で半数以上を占めた。一人の児でトラブルが重複した人数は、1歳児は旧固定法7名が新固定法2名であった。トラブル後の再血管確保は旧固定法12件、新固定法4件であり、新固定法は点滴トラブルが減少され、有効な固定法であったと考える。年齢別では1歳未満児および1歳児の点滴トラブルが多く、成長発達を踏まえた確実な固定法が必要である。看護師は新固定法ではテープの浮き・剥がれ、皮膚トラブルが少ないと回答し、フィルム材の問題が改善され留置針の固定性が持続できていることがわかった。更に点滴トラブルの減少によりケア全般にかかる時間短縮が実感できた。しかし固定しやすいと答えた看護師は14%であり、技術能力の向上を図る必要がある。

## P-240

放射線治療におけるセルフケア支援

～放射線治療日誌を作成して～

高山赤十字病院 脳神経外科 耳鼻咽喉科 口腔外科

中洞 純子、橋本 綾子、小峠 奈未

【はじめに】頭頸部癌における放射線治療の副作用として口内炎や粘膜炎があげられる。これらの副作用は避ける事が出来ず、治療の妨げとなる。これまでもパンフレットを使用し照射前にオリエンテーションを行いセルフケア支援を行っていたが、統一した関わりが出来ていなかった。また放射線科とオリエンテーションの内容が重複していた。今回放射線科と連携し放射線治療日誌を作成した。

【目的】患者自身が放射線治療の経過と副作用を理解でき、副作用予防の為にセルフケア行動がとれる。放射線科と情報共有が出来る。

【取り組み】1.主に出現すると考えられる症状を欄に入れ、患者自身で評価しやすくした。2.フェイススケールを乗せて5段階評価しやすくした。3.記入スペースを拡張し、1枚で1週間分とした。4.パンフレットとセルフケアチェック表を1冊にまとめた。

【結果・考察】今回放射線治療日誌を3人の患者に使用した。また、ケアの見直しや放射線治療を行って行く上でのガイドラインを作成した。出現する可能性の高い症状を表で表し、患者自身で評価を行った。患者からは「症状が理解でき、自分で発見しやすい。」との言葉が聞かれた。副作用をあらかじめ説明し毎日自己評価することで、患者自身の意識向上につながると考える。またこのことはセルフケア行動への動機づけともなったと言える。放射線治療日誌を患者、放射線技師、看護師が毎日確認する事で情報共有でき、患者の状態を把握出来た。副作用を早期に発見し、不安の軽減や苦痛の除去をすることで患者自身が治療に対して前向きになる事が出来た。今後も放射線治療のケアの向上に努めたい。